

に適した種々の RI 標識抗体、ペプチドによる標的組織への選択的な放射能送達への展開を期待さ

せるものである。

5. 新しい放射性医薬品への期待 ——放射性医薬品メーカーの立場から——

東

眞（日本メジフィジックス株式会社研究開発本部技術企画課長）

X 線 CT や MRI などの形態学的分解能に優れた画像診断法が成熟期を迎えており、放射性医薬品とガンマカメラ・PET カメラを用いる核医学診断には、より生理学的・生化学的な診断情報を提供することが求められており、これを実現していくことが核医学の新たな興隆をもたらすことは疑問の余地がない。

このような潮流の中にあって、本ワークショップの他の演者からも指摘されるように、放射性医薬品の研究・開発・製造の全般にわたって新しい発想の展開と技術の確立が求められている。本講では、医療現場に安全で有効な医薬品を安定かつ経済的に供給することを課せられている医薬品メーカーの立場から、以下のような項目に注目しつ

つ、新しい放射性医薬品開発への期待と基盤整備の必要性について概観したい。

1. 利用可能な核種と製剤設計
2. テクネチウムの化学の展開
3. バイファンクショナルキレート（二官能性配位子）技術の開発
4. 放射性ヨード標識技術の確立
5. 高比放射能標識技術の確立
6. 適切な動物モデル系の必要性
7. 薬剤の体内動態と代謝経路の把握
8. 臨床的評価に求められるもの
9. PET 製剤供給の問題点
10. *in vivo* 放射線治療用放射性医薬品開発への展望